

ここでは、著名な学者の式を、この式は使える、これは使えないと、いとも気持ちよく振り分けていたのを思い出す。これは物を造ることに直接タッチされている方々にしかできないことである。そうした資格のある現場技術者の声を技術サロンの場でもっともっと聞かせていただきたいものである。

(筆者・Osamu KUSAKABE, 宇都宮大学助教授)
工学部土木工学科

3年目を迎えた第VI部門論文集へ望む

黒田 勝彦



第VI部門論文集は毎年3月と9月に発行され全会員に無料で配布されているという点では他の論文集に比較して最も多くの会員に読まれているはずであるが、“どうも「論文集」という名前に気後れして中味を見る気がしない”とい

う会員が多いのではなからうか？すでに周知のように輸入技術の時代から自前の開発技術の時代に移っている。にもかかわらず多くの土木技術者が組織の中に安住し自前の技術のストックや開発への努力に無関心なのはなからうか？土木界では特に個人の技術が評価されるという伝統をもたないゆえに一部のトップ技術者におんぶされて生活の糧を得ているも自責の念にかられることが少ない。したがって、積極的に自己の向上を図らなくても何とか生きていける。しかも、責任をもたされ、日夜血の出るような努力をしている技術者とダッコちゃん技術者と給料はたいして差がないし生活も安定している。こんな状況では「多くの会員のためになる論文集を!!」と智恵を絞ってみてもしよせん「ああ、論文集か! 関係ない!」ということで屑筆へ直行ということになってしまふ。

昨年来、たまたま論文集編集委員会の幹事長をおおせつかっていたこともあり、VI部門論文集に関する規程作りに参加し、いろいろの人に多くの意見をお聞きする機会があった。特に、VI部門小委員会の委員長始め各委員の努力と熱意は言葉に書き表わせないほどであり、何とかこの努力の結晶である論文集を一人でも多くの方に読んでいただきたくて、最近ではお会いする人ごとに「第VI部門の論文集をお読み下さい。論文を投稿して下さい

い!」と勧めている。ところが土木学会論文集には創設以来の伝統があり、各部門に対するイメージも固定化され、横割社会に慣れない多くの会員には、「既設の論文集の横糸の役割を果たすVI部門」といってもなかなか慣じみにくいらしい。また、「論文集は難しくてどうも」と頭から敬遠しているむきも多い。えてして権威は民衆とは無縁の存在であり魅力の対象とはなりにくい。論文集は「論文集としての格式と権威」を備える必要があるかもしれないが、度が過ぎると一般技術者とは無縁の存在になる可能性があり魅力もなくなる。このジレンマと必死に闘っておられるのが第VI部門小委員会であるように思える。とはいえ、多くの技術者の意識を改革し、学会への技術者としての参加意識をもっといただくことが今後の学会全体の努力として必要であり、これはVI部門論文集の内容の検討だけで行える事柄ではない。多くの人の宣伝と啓蒙活動が必要で、時にはテーマを決めた特集論文集（もちろん自由投稿論文を排除せずに）等を企画することなど面白い。また、旅費の問題等もあるかもしれないが、地方で活躍するすぐれた技術者にも編集や企画の仕事に参画できる機会を多く作り、草起こしの努力を継続することも必要と思う。自前の旅費でも参画したいと考えている多くの技術者から「学会参画の意識」を抹殺してはならない。そうすることによって、地方に埋もれている「小さな技術」も掘り起こされ光をあてられるようになるのではなからうか？

(筆者・Katsuhiko KURODA, 京都市立大学助教授)
工学部交通土木工学科

3年目を迎えた第VI部門論文集へ望む

中川 博次



新設された第VI部門の論文集を通読して、全会員に親しまれ、活用される論文集を意図して並々ならぬ編集努力が払われた様子がうかがわれ、他部門の論文集とは際立って趣を異にしている。会員の8割以上が実務に携わっている人達であり、それらの会員によって学会が支えられているにもかかわらず、これまで論文集の購読者は15%に満たず、大部分の会員にとって無縁のものと受取られてきた大きな原因として、論文集が主として大学研究者の発